

教育の目的

福沢諭吉

青空文庫

この一編は、頃日けいじつ、諭吉が綴るところの未定稿中より、教育の目的とも名づくべき一段を抜ばっしよ抄うしたるものなれば、前後の連絡を断つがために、意をつくすに足らず、よつてこれを和解わけ演述して、もつて諸先生の高評を乞う。

教育の目的は、人生を発達して極度に導くにあり。そのこれを導くは何のためにするやと尋ねれば、人類をして至大の幸福を得せしめんがためなり。その至大しだいの幸福とは何ぞや。ここに文字の義を細かに論ぜずして民間普通の語を用うれば、天下泰平・家内

安全、すなわちこれなり。今この語の二字を取りて、かりにこれを平安の主義と名づく。人として平安を好むは、これをその天性といふべきか、はた習慣といふべきか。余は宗教の天然説を度外視する者なれば、天の約束というも、人為じんいの習慣というも、そのへんはこれを人々にんにんの所見にまかして問うことなしといえども、ただ平安を好むの一事にいたりては、古今人間の実際に行われて違たがうことなきを知るべきのみ。しからばすなわち教育の目的は平安にありというも、世界人類の社会に通用して妨さまたげあることなかるべし。

そもそも今日の社会に、いわゆる宗旨なり、徳教なり、政治なり、経済なり、その所論おのおの趣おもむきを一にせずして、はなはだし

きは相あいたが互はいちに背馳するものもあるに似たれども、平安の一義に
 いたりては相あいたが違がうなきを見るべし。宗旨・徳教、何のためにす
 るや。善を勧めて精神の平安をいたすのみ。政治、何のためにす
 るや。悪を懲こらし害を防ぎて、もつて心身の平安を助くるのみ。
 経済、何のためにするや。人工を便利にして形体の平安を増すの
 み。されば平安の主義は人生の達するところ、教育のとどまると
 ころというも、はたして真実無妄むもつなるを知るべし。

人あるいはいわく、天下泰平・家内安全をもつて人生教育の極
 度とするときは、野蠻無為むい、義昊ぎこう以上の民をもつて人類のとどま
 るところとなすべし。近くは我が徳川政府二百五十余年の泰平の
 如きは、すなわち至善至美ならんとの説もあれども、この説は事

物の末を見て、その本もとを知らざる者のみ。野蠻の無為、徳川の泰平の如きは、当時その人民の心身、安あんはすなわち安なりといえども、その安は身外の事物、我に向つて愉快を呈するに非ず。外の事物の性質にかかわらずして、我が心身にこれを愉快なりと思うものにすぎず。すなわち万民安堵あんど、腹を鼓こして足たるを知ることなれども、その足るを知るとは、他たなし、足らざるを知らざりしのみ。

たとえば往古おうこ支那にて、天子の宮殿も、茆茨ぼうしき剪らず、土階どかいさん三等う、もつて安しというといえども、その宮殿は眞実安樂なる皇居に非ず。かりに帝ていぎ堯ぎやうをして今日にあらしめなば、いかに素朴節儉なりといえども、段階に木石を用い、屋おくもまた瓦をもつて

葺くことならん。また徳川の時代に、江戸にいて奥州おうしゅうの物を
 用いんとするに、飛脚ひきやくを立てて報知して、先方より船便ふなびんに運
 送すれば、到着は必ず数月の後なれども、ただその物をさえ得れ
 ば、もつて便利なりとして悦よろこびしことなれども、今日は一報の電
 信に応じて、蒸気船便に送れば、数日にして用を弁ずべし。数年
 の後、奥羽地方に鉄道を通ずるの日には、今の蒸気船便もまた、
 はなはだ遅々ちちたるを覚ゆることならん。

ゆえに、古人の便利とするところは、今日はなはだ不便なり。
 今日の便利は、今後また不便とならん。古人は今を知らずして、
 当時の事物を便利なりと思ひしことにて、今こんじん人もまた今後を知
 らずして、今を安楽と思ふのみ。また近くこれを譬たとうれば、かの

煙草を喫する者を見よ。一斤きんの価十錢の葉を喫するも、口に美びならざるに非ず。その後二十錢のものを買い、これに慣るること数日なれば、またはじめの鹿葉そようを喫すべからず。

ついでまた朋友親戚等より、某國産の銘葉めいようを得て、わずかに一、二管を試みたる後には、以前のものはこれを吸うべからざるのみならず、かたわらにこれを薰くんずる者あれば、その臭氣を嗅かぐにも堪えず。もしも強しいて自みずからこれを用いんとすれば、ただ苦痛不快を覚うべきのみ。これを吸煙の上達と称し、世人の実験においてあまねく知るところなり。ひとしく同一の煙草にして、はじめはこれを喫して美なりしもの、今はかえつて口に不快を覚えしむ。然らばすなわちこの鹿葉そようは、最初に美を呈したるに非ず、

ただ我が当時の口にてこれを美と称し快樂と思ひしのみ。すなわち人生の働はたらきの一カ条たる喫煙も、その力よく發達すれば、わずかに数日の間に苦樂の趣おもむきことを異にするの事實を見るべし。

ゆえに天下泰平・家内安全の快樂も、これを身に享うくる人の心身發達して、その働を高尚の域にすすむるときは、古代の平安は今世の苦痛不快たることあるべし。余輩のいわゆる平安とは、精神も形体もともに高尚に達して、この高尚なる心身に応じて平安なるものを平安と名づくるなり。すなわちこの平安を目的とするところの教育の旨むねは、人生の働の一カ条をも空しゆうせずして快樂を得んとするにあり。足るを知るを勧むるにあらず、足らざるを知りてこれを足すの道を求むるにあるものなり。野蠻の無むい為、

徳川の泰平の如きは、平安と称すべからざるのみならず、かえつてこれを苦痛不快と認めざるをえず。その平安の美は煙草の麩葉にひとしきものといいて可なり。

またある人の説に、平安を好むは人情において、あるいは然るに似たりといえども、今日の事実においておおいに然らざるものあり。大は各国の交際に権を争い、小は人々にんにんの渡世に利を貪りむさぼ、はなはだしきは物を盗み人を殺すものあり。なおはなはだしきは、かの血気の少年軍人の如きは、ひたすら殺伐戦闘をもつて快樂となし、つねに世の平安をいとうて騒乱多事を好むが如し。ゆえに平安の主義は、人類のこの一部分に行われて、他の一部分には通用すべからずとの問題あれども、この問題に答うるははなはだ難

きに非ず。国の権を争い人の利を貪^{むさ}ぼるは、他なし、自国自身の平安を欲する者なり。

また、物を盗み人を殺す者といえども、自から利して自己の平安幸福をいたさんと欲するにすぎず。盗んでこれを匿^{かく}し、殺して遁^{とんとう}逃するは何ぞや。他の平安幸福をば害すれども、おのずから害するを好まざるの証なり。また、いかなる盜賊にても博徒にて、外に対しては乱暴無状なりといえども、その内部に入りて仲間の有様を見れば、朋輩の間、自^{おのず}から約束あり、規則あり。すなわちその約束規則は自家の安全をはかるものより外ならず。しかのみならず、この法外の輩が、たがい^{おのず}にその貧困を救助して仁恵を施し、その盗みたる錢物を分つに公平の義を主とし、その先輩

の巨魁きよかいに仕えて礼をつくし、窃盗を働くに智術をきわめ、会同・離散の時刻に約を違たがえざる等、その局処についてこれをみれば、仁義礼智信を守りて一社会の幸福を重んずる者の如し。ゆえに平安の主義は、法外の仲間にも行われて、有力なるものといわざるをえざるなり。

また、血氣けつきの輩はいが、ただ社会の騒動を企望きぼうして変を好み、自己の利益をもかえりみずして妄みだりに殺伐をこととするは、平安の主義にもとるが如くなれども、つまびらかにその内情を察すれば、必ず名利のためより外ならざるを発明すべし。名利とは何ぞや。他なし、自己の幸福、社会の安全に係るところのものなれども、ただ審判の力に乏しくして、あるいは事の成せいを期すること急に過

ぎ、あるいはその事を施行しこうすること劇げきに過ぎて、心事の本色を現わすこと能わざるのみ。

たとえば少年の勇士が死を決して自から快と称する者あれども、その快たるや、ただ絶命のみをもつて快とするに非ず。その時の事情をいえば、本人の心に企くわだつるところの事は大に過ぎて、これに応ずべき自己の力は小にして足らず、その大小の平均を得るに路なきがために、無上の宝たる一命をもて己おのが企つるところの事に殉じ、いささかその情を慰めて、もつて快と称するものなり。けだしこの類たぐいの愉快は、形体に關係なくして精神に属す。形体にありては安楽と称し、精神にありては愉快という。その文字こと異なりといえども、結局平安の主義に洩れざるものなり。

また、今の我が日本にて新政府を建て、今日もつばら社会の平安を欲して焦思^{しょうし}苦慮^{くりよ}する者は誰ぞや。十余年前にありては、しきりに世の多事を好み騒動を企望して余念なかりし血氣の士人に非ずや。その士人の中には殺伐無状、人を殺し家を焼き、およそ社会の平安を害すべき事なれば一も避くるところなく、ついに身を容^いるるの地なきにいたれば、快と称して死につきし者もあり。幸にして死にいたらざりし者が、今の地位にいて事をとるのみ。すなわち昔^{せきじつ}日は乱を好み、今日は治を欲する者なり。

もしも維新の一挙、当初に失敗したらば、この輩はただ世の騒乱を好みて平安をいとう者として、天下後世の評論を受け、あるいはその冤^{えん}を訴うるによしなきを知るべからずといえども、偶然に

今日の事実を見ればこそ、前年に乱を好みしは、その心事のほんし本色よくに非ず、その乱はただ改めて治安をいたすの方便たりしとの事実も、はじめて明白なるを得たることなれ。これまた本論の一例として見るべし。人生決して乱を好むものに非ざるなり。

右の如く平安を好むの人情は、世界中に通用してたがうことなく、各国の交際も人々にんにんの渡世とせいも、その目的、平安にあらざるはなし。なお進みて戦鬪殺伐、物を盗み人を殺す者も、この主義に洩れもざるものとするときは、人生の目的は、他を害して身を利するにすぎず。これをもつて教育の本旨とするは当らざるに似たれども、人生発達の点まなこちやくに眼を着すれば、この疑を解くに足るべし。そもそも人生の智識、未だ発せざるに当りては、心身の働はたらき、ただ

形体の一方に偏するを常とす。いわゆる手もて口に接する小児の如き、これなり。野蛮未開、耕して食らい井を掘りて飲むが如き、これなり。すでに食らいすでに飲むときは、口腹の慾、もつて満足すべしといえども、なお足らざるものあり。衣服なかるべからず、住居なかるべからず。衣食住居すでに備わり、一家もつて安樂なり。なお足らざるものあり。隣人のつきあいなかるべからず、社会の交際なかるべからず。

すでに交際あるときは、その交まじわるところの者は高尚にして美ならんことを欲するもまた人情なり。他人の醜美は我が形体の苦樂に關係なきものなれども、その美を欲するはあたかも我が家屋を装おさい庭園を脩おさめ、自からこれを観みて快樂を覚ゆるの情こころに異ならず。

家屋庭園の裝飾はただちに我が形体の寒熱痛^{つうよう}痒に感ずるに非^{あら}ざれども、精神の風致を慰^{なぐさむ}るの具^ぐにして、戸外の社会に交りてその社会の美を觀るもまた、我が精神の情を慰めて愉快を覚えしむるの術なり。

現に今日の人間交際を見るに、いかなる人にも、交^{まじわり}を求むるに上流を避けて下流につく者を見ず。ことさらに富貴の人を嫌うて、貧賤を友とする者を見ず。その富貴上流の人に交るや、必ずしも（往々あれども）彼の富貴を取りて我に利するに非ざれども、おのずからこれに接して快きものあればなり。なお俗間の婦女子が俳優を悦び、男子が芸妓を愛するが如し。そのこれを愛するや、必ずしも（往々あれども）色慾に出ずるに非ず。ただこれを觀て

我が情を慰むるのみ。すなわち我が形体に関係なくして他の美を悦ぶものなり。すでに社会の美を欲す。然らばすなわち、その醜にくを悪むもまた人情ならざるをえず。その醜にくを変じて美となすべきの術あれば、その術を求めてこれを施すもまた人情なり。

ここにおいてか貧困を救助し、文盲を教育する者あり。これを仁人君子と称す。仁人君子は、我が利害を棄てて人のためにし、我に損して他に益えきすといえども、その実は決して然らず。その棄すつるところのものは、形体に属する財物か、または財にひとしき時間、心労にして、その報むくいとして得るものには、我が情を慰むるの愉快あり。すなわち形体の安楽を売りて精神の愉快を買うものなり。人生の発達、そのまったきを得て、形体の安楽にかね

て精神の愉快を重んずるの日にいたり、はじめて人類至大の幸福を見るべきなり。

けだし、かの盜賊以下、他を害して身を利する者の如きは、その生の働、發達せずして、平安の主義にしたがうこと、わずかに形体の一方に止まりて、未だ精神の愉快なるものを知るにいたらず、あるいはその愉快とするところの境界はなほだ狭くして、身外の美をもつておのずから楽しむの情に乏しきもののみ。なお無智の小児が物の旨否しひを知りて醜美を弁せざるが如し。

教育の旨は、形体と精神とふたつ両ながらこれを導きて、その働の極度にいたらしむるにあり。ゆえに世に害他利身がいたりしんの輩はいあるは、教育の未だあまねからずして、人生の未だ發達せざるものなれども、

平安の主義はおのずからその間に行われて故障を見ざるものと知るべし。

形体の安樂を知りて精神の愉快を知らざる者は、とくに盜賊以下に限らず、現今世界各国の交際においてもまた然り。かの西洋諸国の人民がいわゆる野蛮国なるものを侵して、次第にその土地を奪い、その財産を剥ぎ、他の安樂を典して自から奉ずるの資となすが如き、その処置、毫も盜賊に異ならず。

在昔、^{ざいせき}欧羅巴の白人が亜米利加に侵入してその土人を逐い、

英人が印度地方大洋諸島に往来して暴行をたくましゅうしたるもその一例なり。今日西洋において仏国盛なり英国富むというといえども、その富のよつてきたるところは何処にあるや。竜動に

巍々たる大廈石室なり、その市街に来往する肥馬軽車なり、公園の壯麗、寺院の宏大、これを作りてこれを維持するその費用の一部分は、遠く野蛮未開の国土より来りしものならん。ただに遠国のみならず、現に両国境を接する日耳曼と仏蘭西との戦争において、日は仏より五十億フランクの償金を取上げたり。他なし、隣国を貧にして自から富むの手段のみ。

かくの如きはすなわち、日耳曼の人民は隣人の貧困をみて愉快を覚ゆる者ならん。けだし今の世界各国の人民は、自から安樂を知りて他の不幸を知らざる者なり。一国内形体の安全を求めて、国外の安全に愉快を覚ゆるの精神に乏しき者なり。すなわち国の教育の未だ上達せざるものといいて可なり。

青空文庫情報

底本：「福沢諭吉教育論集」岩波文庫、岩波書店

1991（平成3）年3月18日第1刷発行

底本の親本：「福沢諭吉選集 第3巻」岩波書店

1980（昭和55）年12月18日第1刷発行

初出：「東京学士会員雑誌 第1号」

1879（明治12）年6月発行

※底本276ページの注釈にある、前書を付加しました。レイアウトは他の論文に準拠しました。

※「貪《むさぼ》り」と「貪《むさ》ぼる」の混在は、底本通り

にしました。

入力：田中哲郎

校正：noriko saito

2007年2月13日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waazora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

教育の目的

福沢諭吉

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>